（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【実践地域】

番号	５９	機関名	京都市教育委員会

実践地域名	拠点校名	児童生徒数
京都市	下京中学校	592
	梅小路小学校	253
	向島東中学校	218
	向島小学校	238
	向島藤の木小学校	163

○　実践研究の具体的内容

児童生徒が主体的に学び，思考・表現し，探究する指導方法を研究するとともに，カリキュラム・マネジメントの視点から，学校の活性化，教職員の学校運営への参画意識の向上を図ることを主眼とした。

具体的には，平成２８年度に続き，めあてを明確にした授業展開及び振り返りを活用した自己評価の蓄積，思考ツールや知識構成型ジグソー法等を活用したグループワークの充実，パフォーマンス評価を取り入れた単元構想の設定や対話形式の学習の促進など，拠点校それぞれの研究手法・授業デザインのもと，学習指導・評価の改善について研究実践を進めてきた。

研究実践にあたっては，京都大学大学院の西岡加名恵教授（教育学研究科）による「本質的な問い」「パフォーマンス課題」に係るワークショップを実施する中で，単元構想のあり方について，各教員が単元計画書・指導案を作成し，授業を行った後，ワークショップで交流するという実践を重視した。（各教員が作成した単元計画書は別添参照）

ワークショップでは，事前に西岡教授に各教員が作成した単元計画書・指導案を確認いただき，各教員の課題等を整理したうえで，ワークショップ（指導・助言）に臨む流れとした。西岡教授はもとより，研究室の大学院生にも参画いただき，各グループの議論をサポートしてもらいながら，同じ教科の他校教員同士のグループにおいて，「本質的な問い」等について自校の児童生徒の実態も踏まえながら意見交流を進め，それを自校に持ち帰り，校内研究を通した更なる深まりを目指した。

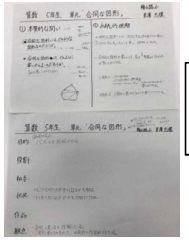
また，ワークショップには，校長等も参画することで，参加教員が自校で孤立することなく，学校全体の取組として研究を進められる環境づくりに配慮した。

［参考］平成 29 年度年間スケジュール

４月～	パフォーマンス課題を設定して，各校において６～７月で授業実践できる単元の選定及び単元計画書の作成	（各校）
５月２２日（月） 16:30～18:30	**第１回ワークショップ** ⑴　パフォーマンス課題（「本質的な問い」「パフォーマンス課題」）についての講義 ⑵　パフォーマンス課題づくりのワークショップ（教科別・小中混同グループ）	会場 下京中学校
６月～７月	第１回ワークショップをもとに，パフォーマンス課題・評価を授業実践	（各校）
７月２６日（水） 14:00～17:00	**第２回ワークショップ** ※パフォーマンス課題を設定した授業（6・7 月）の実践交流（ＷＳ）	会場 下京中学校
８月１８日（金） ～１９日（土）	京都大学　教育研究開発フォーラム（E.FORUM）※任意参加（10 名程度）	会場 京都大学
９月１２日（火） 15:30～17:30	**第３回ワークショップ** ※パフォーマンス課題を設定した授業の実践交流（ＷＳ）	会場 下京中学校
１１月	各校で研究発表会（公開授業） 11 月 2 日梅小路小，13 日下京中，29 日向島東中，向島小，向島藤の木小 11 月 29 日　実践協議会（外部委員への経過報告／協議）＠向島小	（各校）
１月２９日（月） 15:00～17:30	研究協議会（各校から研究成果を報告・発表し，ＷＳ等を実施。） 実践協議会（外部委員への報告／協議）	会場 下京中学校

・第１回ワークショップ（5/22）

・西岡教授によるパフォーマンス課題の講義
・講義を踏まえての拠点校に教員同士によるワークショップ



・各教員が「本質的な問い」「永続的理解」等についてワークシートにまとめ，意見交換

・第２回ワークショップ（7/26）

・第１回ワークショップ後の授業実践をもとに，グループで課題点等を協議し，ワークシートにまとめ，グループ発表。西岡教授からの指導・助言。
・グループ協議には大学院生も参画いただき，教員から率直な疑問等を投げかけ，議論を深めた。

・第３回ワークショップ（9/12）

・11 月の研究発表会（公開授業）に向けての，ワークショップ。これまでの実践やワークショップを踏まえての仕上げの単元構想。
・教員が作成した単元計画書について，具体的な改善事項等を西岡教授・大学院生から伝達し，グループ（教科ごと）でも共有。

・研究協議会（1/29）

・西岡教授による総括講義

・各校からの実践発表

・実践発表後，拠点校に加え，本市独自の研究指定校等も参画し，意見交換。

本研究の総括的な場となる研究協議会においては，各教科（国語，社会，算数・数学，理科）の実践発表を行い，単元計画書・指導案を作成する中での様々な気付きや，児童生徒の学習に取り組む姿勢が高まっていることなどについて報告された。「本質的な問い」とは，「その単元を貫く問い」と言えるが，単元構想・計画において，「本質的な問い」が適切に設定されなかった事例などをもとに，単元を構想する際，どの授業・場面で問いや学習活動を設定することが効果的な学びにつながるのか，まだ試行錯誤する教員が多くみられる現状であり，引き続き，研究実践を進めていくことが必要であることが共有された。

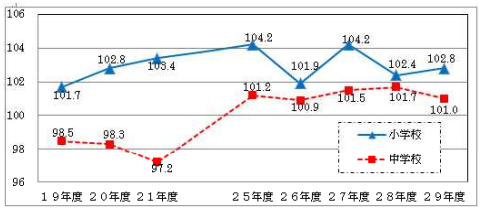
○　実践研究の成果とその分析

各校においては，学習・指導方法の不断の改善を図るため，①「本質的な問い」「パフォーマンス評価」をベースとした単元構想と②思考ツールや知識構成型ジグソー法等を活用した学習活動を取り組んだ。西岡教授からの「パフォーマンス評価は「評価」，思考ツールや知識構成型ジグソー法等は「授業手法」であり，その適切な組み合わせ方を模索することも研究であり，研究の成果はその効果的な活用（組み合わせ）が，児童生徒の学びの充実につながる」との助言も踏まえ，①は年間を通した単元構想や指導計画を見据えた中長期的な視点，②は各授業や単元ごとの短期的な視点として，相互に関連させながら実践研究を進めた。また，各教員・各校が各自で実践するのではなく，ワークショップ等を通じて，同じ目標に向け，一体となって取組を進めたことで，学校間連携や支部内連携へとつながり（取組の広がり）も見えるようになった。

（１）研究成果

①市全体の学力傾向

本市における平成２９年度全国学力・学習状況調査の結果（28 数値）を見ると，



全国学力・学習状況調査　京都市の指数（全教科合計）
※全国平均を 100 とした場合の京都市の平均正答率の値

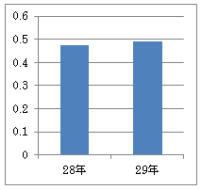
小学校では国語Ａ７６（←74.0），国語Ｂ５９（←59.9），算数Ａ８０（←79.1），数学Ｂ４９（←48.6），中学校では国語Ａ７８（←75.9），国語Ｂ73（←67.8），数学Ａ６６（←63.4），数学Ｂ４９（←45.6）と，全国平均をそれぞれ０．４～５．２ポイント上回る結果となり，全体的に向上してきている。

②拠点校の学力傾向（例：向島東中学校）

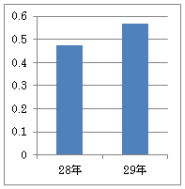
基礎・基本の定着に課題が見られる向島東中学校においては，本研究により授業改善が進みつつあり，平成２９年度全国学力・学習状況調査における全国の平均正答率を上回る生徒の割合も，国語Ａ・Ｂ，数学Ａ・Ｂいずれも，２８年度と比較し向上するなど，一定の成果も見られる。（民間の教育機関等との連携による学力分析から引用）

基礎・基本の定着と活用・探究の応用的な学習の相関については，「どのように学ぶのか」という学びの質や深まりを重視することが必要であり，引き続き，検討を進める必要がある。

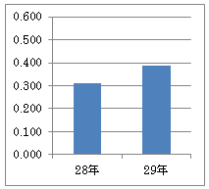
【国語Ａ】



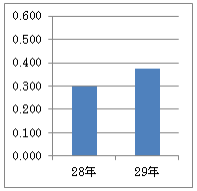
【国語Ｂ】



【数学Ａ】



【数学Ｂ】



③児童生徒の学習活動の捉え（全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査より）

２８年度に引き続き，放課後や長期休業期間を活用した自学自習による補充的な学習に加え，授業でのペアやグループによる問題解決的な学習，対話的な学習など，主体的・協働的に学ぶ機会が創出されており，児童生徒自身もそうした学習活動を肯定的に捉え，意識的に取り組んでいる様子が見られる。

例）「授業では，学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」という問いに，「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童生徒の割合

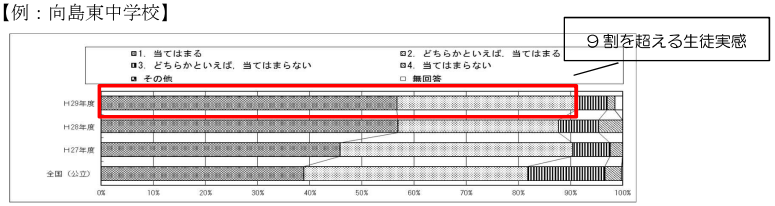
【小学校（全市）】

	28 年度	29 年度
京都市	84.3	85.1
全　国	83.4	84.5

【中学校（全市）】

	28 年度	29 年度
京都市	81.2	84
全　国	77.8	81.8

【例：向島東中学校】



（２）成果の分析

各拠点校の児童生徒アンケート等を見ると，思考ツールの活用においては，自分の考えを深め，広げることができたという実感を持てている。また，知識構成型ジグソー法においては，学力低位にあった生徒が，自分の考えや意見を他者に伝えることの苦手意識を克服したり，仲間からの説明を聞くことで理解が深まったりした様子が見受けられるなど，主体的に学びに向かう力の向上や対話的な学習の充実が図れている。

児童生徒の変容を見て，教職員も思考ツールや知識構成型ジグソー法の意義を捉え，それぞれの指導方法の特徴を理解して，授業内容や児童生徒の実態等に応じて，より効果的な指導方法を取り入れ，授業の創意工夫を行う意識も高まってきている。西岡教授の指導・助言により，学術的な裏付けのもと進めることも，教職員にとって，取組への実感が深まったと考えている。

学力低位層や家庭の経済状況が厳しい児童生徒が多い向島東中学校ブロックの拠点校においても，日頃は授業中に集中できない児童生徒が，授業改善によって休み時間になっても教師に質問するなど，意欲的に学習に取り組む姿勢が見られるようになってきており，こうした児童生徒の変容が，上述のとおり，教員の指導力向上に向けての更なる意欲向上に大きく寄与している。単元計画・指導案の改善が，授業改善につながり，児童生徒の学習活動の改善につながるといった好循環が生まれている。

次年度は，こうした教員の意識変容が見取れるよう，研修を通じて参加教員ごとのポートフォリオを準備し，研修自体の評価をモニタリングできる仕組みをつくることで，継続的な取組となるよう工夫したいと考えている。

（３）課題の分析

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて，２年の研究実践を踏まえても，各教科等の見方・考え方が働く学習プロセスの構想において，「本質的な問い」が「単元を貫く問い」であるとの理解が十分でないことに加え，「パフォーマンス評価」は単元で学んだ知識・技能を総合的に活用して取り組む「まとめ活動」であるが，単元の流れの中でどこに位置付けるべきかの試行錯誤，「パフォーマンス評価」に関連したルーブリック作成の難しさ，課題解決後さらに児童生徒が意欲的に自ら次の課題を設定できるような深い学びの実現（イメージ）などに対して，各教員・学校で課題が散見される。また，思考ツールや知識構成型ジグソー法を活用することによる思考手順の固定化や授業準備の煩雑化なども課題として挙げられる。

さらに，向島東中学校ブロックの拠点校では，学力低位層の児童生徒が多いことから，基礎的・基本的な内容の習得と活用・探究の両立に課題が残っている。

本研究での成果を踏まえ，さらに長期的に取り組むことで，上述の課題解消とともに，児童生徒の主体的に学びに向かう力の向上，対話的な学びや問題解決的な学習，協働型授業等の実践による「本質的な学び」の深まり（深い学び）に向けて，引き続き研究実践に取り組んでいくことが必要と考えている。

○　実践研究成果の活用方策

各拠点校における研究発表会や公開授業等を中心とした取組の成果の普及に努めるとともに，本研究のまとめとして研究協議会も実施し，拠点校以外の学校の参加のもと，実践の成果・課題の共有を図った。

しかしながら，拠点校以外の教員には，ワークショップ等への継続的な参加が難しく，研究内容の難易度が高いこともあり，成果と課題の共有のみに留まり，実践につなげることにまで至らなかった。また，拠点校の教員においても，研究内容の校内伝達を試みたが，研究内容の難易度の高さから，内容が深まらず，他教員の実践につながらなかった。そのため，次年度以降は，実践校（拠点校）を増やしながら，研究内容の汎用性にも留意しつつ，多くの教員が継続的にワークショップに参画できる仕組みを構築するなど，取組の裾野を広げていく必要がある。

平成３０年度以降については，具体的に，２年間の研究で拠点校教員が作成した単元計画書・指導案等をもとに，現在の拠点校（５校）をベース校として，小中一貫の視点も踏まえながら，２中学校ブロック程度（４～６校程度）を新たに拠点校に加え，研究発表会（公開授業）や研究協議会等を通じた，全市への普及を進めていきたい。また，重層的な取組とするため，本年度に引き続き，本市独自の新学習指導要領の実践に向けた研究指定を行う予定である。

本研究の上位機関である実践協議会において，各拠点校での実践を踏まえ，「パフォーマンス評価に取り組むことで，ただ漠然と教科書の内容を教えるだけではなく，主体的・対話的な学びにつながる具体的な指導方法を考察・実践する中で，児童生徒の実態把握（児童生徒の姿が見えたこと）が最大の発見である。」との指摘を十分に踏まえ，平成３１年度（小学校）および平成３２年度（中学校）の新学習指導要領に基づく教科書採択時に改訂予定である「京都市教育課程指導計画（京都市スタンダード）」において，本研究実践を踏まえた，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた単元構想に基づく，授業改善策を盛り込むことにより，全市での実践を更に促進したい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	５９	都道府県名	京都市

拠点校名	京都市立下京中学校

○　実践研究の具体的内容

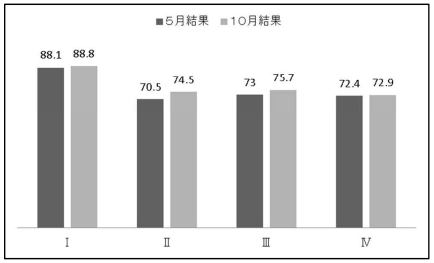
本事業と本校の現状を踏まえ，２９年度は以下の研究テーマを設定した。

学び深める教育実践「本質的な問い」「対話の可能性」「思考ツール」の研究
～資質・能力の育成につなげる
キャリア教育の展開（下京中学校版：アクティブ・ラーニング）～

新しい時代に求められている資質・能力は，主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の質的改善によって育成される。そして，主体的・対話的で深い学びとは，学習の形態よりも，質を重視した授業展開を指している。

本校は昨年度，「下京中学校版：アクティブ・ラーニング」と称し，思考ツールを活用することによって主体的・対話的で深い学びの実現を目指して教育実践を積み重ねてきた。生徒の反応やアンケート結果（※）から，学びを深める実践として効果を上げることができた。ただ，生徒の主体的に学ぶ姿勢に関して，改善の余地が見られた。

（※）平成 28 年度の年２回のキャリアアンケートの比較（右図参照）から，「Ⅰ：コミュニケーション能力」「Ⅱ：考える能力」「Ⅲ：行動する能力」「Ⅳ：創造する能力」の４つの能力すべてが上昇しており，特に，「Ⅱ：考える能力」「Ⅲ：行動する能力」は大きな上昇を示している。



昨年度の研究結果をもとに，キャリア教育の視点を取り入れた授業改善を今年度も進めていった。主体的・対話的で深い学びを実現することにより，生徒の資質・能力を育成し，同時に生徒の自尊感情も高めていくことを目指した。

生徒の主体的な学びに重点を置き，「思考ツール活用」による対話的な学びを，さらに活性化するために，今年度は「本質的な問い」と「対話の可能性」に着目した。授業の中核に位置する「本質的な問い」を提示することにより，生徒が自ら課題を見つけ，問題解決に向かうことができると考えた。そして，深い学びを実現するためには，生徒同士の対話が必要不可欠であり，対話を通して生徒は新しい認識を得ることができる。生徒同士の学びを深める「対話の可能性」を見出していった。

さらに，生徒の深い学びを実現するため，パフォーマンス課題を設定し，「問い」についての考察を深め，単元構想や授業改善への視点につなぐこととした。また，「次期学習指導要領改訂等に向けたこれまでの審議のまとめ（2016 年 8 月 26 日）」においては，「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには，指導と評価の一体化を図る中で，論述やレポート作成，発表，グループでの話合い，作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価を取り入れ，ペーパーテストの結果にとどまらない，多面的・多角的な評価を行って行くことが必要である。」とされている。パフォーマンス評価とは，知識やスキルを状況において使いこなすことを求めるような評価方法の総称である。パフォーマンス評価を行うためには，評価につながるパフォーマンス課題を準備する必要がある。同時に，生徒の学びを視覚的に捉えるためにルーブリックの作成も行わなければならない。

そのため，昨年度に引き続き，パフォーマンス評価のあり方について，西岡加名恵教授（京都大学大学院教育学研究科）や京都大学院生による，ワークショップ形式での研修や単元計画書の添削等の指導のもと，本研究指定を受けている他校の教科担当者との意見交換や，校内研究を進めながら，教職員が共通理解のもと授業実践を行った。

（時期）	（取組）	（内容）
４月	校内研修	キャリア教育の視点に立ち，資質・能力の育成を全ての教育活動で意識するよう共通理解し，本質的な問い・思考ツールの説明と実践例を紹介する。
５月	生徒アンケート	生徒の現在の資質・能力を図るために生徒アンケートを実施する。
	ワークショップ	京都大学西岡加名恵教授からパフォーマンス課題についての講義を受ける。
６月	公開授業	全教職員が本質的な問いを提示した授業を展開する。
	ワークショップ	パフォーマンス課題を取り入れた単元計画書を作成する。
８月	校内研修	６月の公開授業を終えての振り返りを行う。９月の校内研究授業に向けて教科会を開き，教科で有効な本質的な問い・対話・思考ツール・パフォーマンス課題の活用方法を考える。
８月	小中合同研修会	９年間を見通した資質・能力の育成を図る授業実践の工夫を共有する。
９月	校内研究授業	教科で作り上げた授業を２時間全教職員が公開する。他教科の授業を参観し，各手法の効果と主体的・対話的で深い学びの姿を共有する。
	ワークショップ	パフォーマンス課題のルーブリックを作成する。
９月	校内研修	１１月の研究報告会に向けて，研究テーマに沿った授業の内容を検討する。９月の校内研究授業をもとに，主体的・対話的で深い学びの実現を求める。
１０月	生徒アンケート	第２回の生徒アンケートを実施する。１回目と比較分析する。
１１月	研究報告会	これまでの研究の成果を報告する
１１月	研修会	研究報告会を終えて，研究授業における成果と課題を共有する。
１月	実践報告会	パフォーマンス課題を取り入れた実践授業の交流をする。
２月	自主研修授業	資質・能力を育成する効果的な授業展開を校内で公開し，授業内容を共有する。

パフォーマンス課題は，単元で学んだ知識・技能を総合的に活用して取り組む，「まとめの課題」として単元の中に位置付けられるものである。よって，パフォーマンス課題に取り組み，生徒の姿とルーブリックを照らし合わせることで，生徒の学びの深まりを視覚的に捉え，深い学びの実現を目指した。

以下は，実践した本質的な問いとパフォーマンス課題の一例である。

国語科【問い】文学的文章の魅力は何か。
【パフォーマンス課題】優秀作品の書評を書こう。
社会科【問い】二度の世界大戦から人類が学んだことは何か。
【パフォーマンス課題】戦争から学んだことを小学生に伝えよう。
数学科【問い】関数とは何か。
【パフォーマンス課題】一次関数とはどんな関数かをレポートにまとめよう。
理科　【問い】生きるために、どのような体のしくみが備わっているのか。
【パフォーマンス課題】生命を維持するしくみを相手に説明しよう。

○　実践研究成果・分析及び活用方策

①実践を振り返って

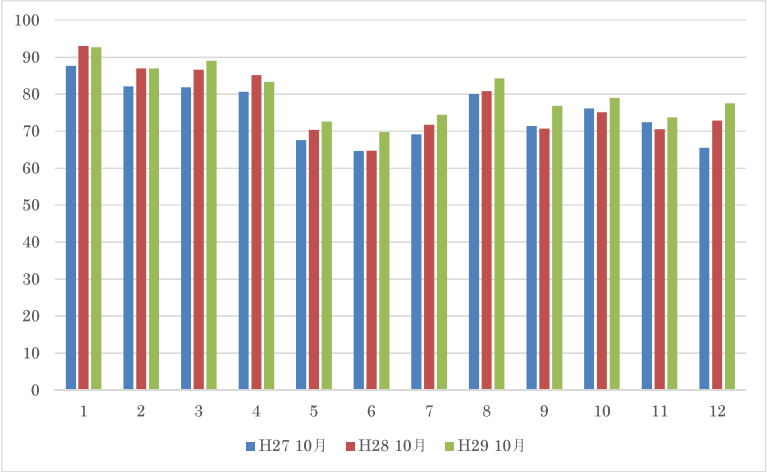
本校のキャリア教育の取組と，アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とを結びつけるために，下京中学校でめざす資質・能力を定め，下京中学校版：アクティブ・ラーニングと称して学びを深める実践を積み重ねてきた。以下は校内研究授業を振り返っての本校教職員の感想の一部である。

■思考ツールを効果的に活用することが大切だと感じた。「考える→話す・聴く→自分の言葉でまとめる」のプロセスを大切にすることで深い学びを実現できる。
■思考ツールを活用して考えをすすめるためには，最初の「問い」の内容が大切だ。
■どのような問いを設定するかで，生徒の学びの様子が変わってくる。
■対話を通して，教え合い，伝え合うことが必要。生徒の思考をゆさぶる問いを提示することで主体的に取り組める。
■過去の知識と今学んでいることがつながるような授業を提案しなければならない。
■パフォーマンス課題に取り組むことで，生徒はこれまでもっていた知識をつなげて新しい考えを生み出すことができていた。

今年度着目した「本質的な問い」「対話の可能性」「思考ツール」，さらには「パフォーマンス課題」は，全教職員が同じ目標に向かって進むために大変効果的な具体策であった。下図は，各教科で主体的・対話的で深い学びを実現するために効果的な手法を考えたものである。各教科の指導者が，これまでの自分自身の授業方法を再考し，新しい視点となる「本質的な問い」「対話の可能性」「思考ツール」「パフォーマンス課題」に目を向け，意見を交流する。毎月の職員研修の後に行う教科会では，どの教科でも議論が起こり，深い学びを実現するための方法について模索していた。深い学びをどのように実現するか。さらにはどのように見取るか。難しい問題も，同じ疑問を持つ教職員同士が頭をつきあわせて話し合うことにより，教職員間の連携がさらに深まっていった。校内研究授業では，自身の教科だけではなく，他教科の授業も参観することで，さらに視野が広がり，教科の枠を超えて，全教職員でそれぞれの手法の理解を深めていくことができた。

②研究の検証

これまでの取組を振り返って，下京中学校版：アクティブ・ラーニングとして，「本質的な問い」「対話の可能性」「思考ツールの活用」の研究は，一定の成果を上げたと言える。何より，生徒が主体的に活動し，自分の考えを他の人に説明したり書いたりできていること。話し合い活動を通じて考えが深まった・広がっている実感を持てていることが大きな成果である。対話を通じて知識をつなげていき，新しい認識を得る楽しさを生徒自身が実感しているようである。これまでの取組を振り返って，既存の知識と新しい知識をつなげ，認識を広げていく深い学びを実現することができたのではないだろうか。下のグラフは，全校生徒の３年間のキャリアアンケート（毎年 10 月）の推移である。（下記アンケート事項参照）



1. 友だちや家の人の意見を聞くときに，その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか？
2. 相手が理解しやすいように工夫しながら，自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか？
3. 自分から役割や仕事を見つけたり，分担したりしながら，周囲と力を合わせて行動しようとしていますか？
4. 自分の興味や関心，長所や短所などについて，把握しようとしていますか？
5. 気持ちが沈んでいるときや，あまりやる気が起きない物事に対するときでも，自分がすべきことには取り組もうとしていますか？
6. 不得意なことや苦手なことでも，自ら進んで取り組もうとしていますか？
7. 分からないことやもっと知りたいことがあるとき，自ら進んで資料や情報を収集したり，だれかに質問したりしていますか？
8. 何か問題が起きたとき，次に同じような問題が起こらないようにするために，何をすればよいか考えていますか？
9. 何かをするとき，見通しを持って計画的に進めたり，そのやり方などについて改善を図ったりしていますか？
10. 学ぶことや働くことの意義について考えたり，いま学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか？
11. 自分の将来について具体的な目標を立て，その実現のための方法について考えていますか？
12. 自分の将来の目標に向かって努力したり，生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか？

資質・能力の育成をめざした授業改善が，生徒のキャリア発達を促す一因となり，３年間の変化を感じさせてくれている。

主体的・対話的で深い学びを実現することが，めざす資質・能力の育成へとつながり，生徒のキャリア発達を促すことをこれまでの研究を通じて確かに実感することができた。今後は，現在の取組の方向性を継続しつつ，深い学びを求めて，アクティブ・ラーニングの効果的な手法からの授業改善にさらに取り組んでいきたい。それにより，めざすべき資質・能力を生徒や教職員，保護者，地域が明確に共有することによって，全校生徒のキャリア発達をさらに促していく。将来自立した大人として社会に出ていく生徒の姿を思い描きながら，これからも日々研鑽に励んでいきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	５９	都道府県名	京都市

拠点校名	京都市立梅小路小学校

○　実践研究の具体的内容

今年度，研究主題を「自ら考え，行動する『生きる力』を身に付けた子どもの育成～『主体的・対話的で深い学び』を実現するカリキュラム開発と実践～」と設定し，研究に取り組んだ。研究の構想を図示すると次のようになる。

この構想図を基に，今年度は次の(1)から(6)の６点について取り組んだ。

(1) 単元構想の改善

■深い教材研究

児童観（実態把握）→　教材観（単元の特徴）→　指導観（単元の展開）

○既に身に付いている力と既習事項を確認するとともに本単元で身に付けたい力と知識・技能を明らかにする。

■新学習指導要領の内容を基に

○単元の評価規準を三つの資質・能力で表す

○指導内容を指導案に明示する

■単元名の工夫・子どもたちの生活に根ざした学習課題の設定

○子どもたちにとって必然性のある学習課題となるように単元名，導入学習を工夫する

■補助教材の開発

○教科書だけではなく，子どもの実態に合わせて補助教材を開発する（連続型テキスト・非連続型テキスト）

○言語活動を意識し，課題設定，課題解決の為に開発した補助教材を活用する

■単元展開

第一次
　導入学習（既習事項の確認と新しい出会いの工夫）
　子ども自身が学習課題を設定し，学習計画を立てる
第二次
　課題解決的な学習
　体験的な学習・協働的な学習の位置づけ
第三次
　表現から交流へ
　知識・技能の定義
　自己評価・相互評価
　発展学習　　他教科等・実生活での活用

第二次　体験的な学習の様子

第二次　協働的な学習の様子

第二次　ゲストティーチャーとの学習の様子

第三次　表現（プレゼンテーション）の様子

(2) 単位時間の授業改善

■子ども司会

○進行・司会を子どもたちで行う

司会・副司会（記録）・タイムキーパー

全員が司会をできるようにする

掲示物：「司会力を身に付けよう」「どう考えましたか（ハンドサイン）」

手持ちカード：「司会カード」

子ども司会の様子

低学年
話題について時間を考えながら進行する

中学年
共通点，相違点を意識して，授業のねらいを意識して進行する

高学年
協議か討論かを意識して，意見を整理しながら進行する

■1 時間の学習の流れの明確化

導入
・前時の復習
・学習課題の確認
・１時間の流れの確認
・教師の説明

Personal work

Group work

Class work

展開
・学習課題を解決するために
・Personal work　自分の考えをしっかりともつ
・Group work　グループで考えを交流する　交流シート・ホワイトボード・タブレット
・Class work　考えをまとめ，共有する

総括
・学習のまとめ（学習課題に対して）
・振返り（がんばれたこと・がんばれなかったこと・次にやりたいこと）
知識・技能，思考・判断・表現について
ラーニングスキルについて

■思考スキルと言語活動を伴う学習活動の位置付け

(3) 各教科等　横断的なカリキュラムの開発

■年間指導計画を作成し，各教科等間で「内容」「知識・技能」の関連を可視化
思考スキルも意識

■パワーアップタイムの設定（モジュールタイムの活用）
○汎用的能力の育成をめざして取組を進める　ポイントシートの作成

思考力　「考える」から「どのように考えるか」を明らかにする

低学年	中学年	高学年
えらぶ くらべる わけ	選択→決定する 比較する 理由付ける 分類→整理する 関係付ける 予想する	選択→決定する 比較する 理由付ける 分類→整理する 関係付ける 予想する 評価する 要約する 応用する

低・中・高学年において身に付けたい思考スキル

分類→整理する

関係付ける

言語能力　語彙力・要約力等
表現力　プレゼンテーション・記述等
課題解決力　ラーニングスキル　学び方

汎用的能力を育成するためのポイントシートの一部

(4) 外国語教育

■日常生活の中で外国語に慣れ親しめる環境づくり
○英語に親しむ　季節の掲示板・教室等の英語表記・会話を楽しむ相槌コーナー
○英語を文字と音声で親しむ　English Pen の活用
○CLIL の考え方を生かして
外国語活動の時間に他教科等の教材・内容を扱う
他教科等の時間に英語を使う

English Pen

季節の掲示板で
English Pen を使っている様子

■ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材の活用
外国語活動の時間に担任とティーム・ティーチングを行い，生きた英語に触れる機会を充実させることで意欲を高める。

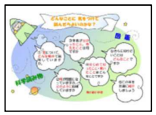
留学生との交流

京都駅でのインタビュー

(5) 読書活動の充実

■読みの視点を与えた読書　朝読書の時間
低学年・中学年・高学年に合わせた
「物語」と「科学読み物」の読みの視点カード

低学年「物語」


高学年「科学読み物」

読みの視点カード

■ブックウォーク
決められた期間で，どんな種類の本をどのように読書をするか自分で決めて読書をする。
夏休み・冬休み

■お家で読書
読書週間にお家の人と一緒に同じ本を読み，感想を交流する
読書の仕方は自由（親が読み聞かせ，子どもが読み聞かせ等）

ブックウォーク宣言高学年

(6) ＰＤＣＡサイクルによる子どもの見取り

子どもたちに，次の三つの視点，各 5 項目計 15 項目のアンケート調査を行い，変容を分析，検証を行う。（5 月・10 月・3 月）

夢に向かって友達と協働する子ども
・自分にはよいところがあると思う
・友達のよいところを見つけることができる
・友達と一緒に学習するのは楽しい
・友達のよい考えに気付き，取り入れている
・将来の夢や目標をもっている

一生懸命学び　社会とのつながりを大切にする子ども
・今まで学習してきたことをつかって考えている
・分からないことやできないことがあっても，ねばり強く考えたり，最後までやりきったりしている
・めあてや課題をもって，授業に取り組んでいる
・授業の中で，１時間の見通しをもっている
・学校で学んだことを生活や社会の中で役立てている

知識・技能を豊かに生かす子ども
・授業の中で，分かったことやできたことがある
・相手の考えを受けて，自分の考えを明らかにしている
・自分の考えを伝えようとしている
・自分の考えを，理由をつけて伝えている
・パワーアップタイムに取り組んだことを，ほかの学習にも生かしている

(7) 校内研修に係る取組内容

前年度の研究を受け，次のような過程をたどり「理論研修」「授業研修」「ワークショップ」「環境整備」の四つの取組を進めた。

４　月

研究主題
「自ら考え，行動する『生きる力』を身に付けた子どもの育成」
～「主体的・対話的で深い学び」を実現するカリキュラム開発と実践～

子ども主体の授業をめざし，研究をスタートさせる。
研究教科は「国語」「算数」「外国語活動・外国語」に設定する。

５　月

文部科学省元教科調査官井上一郎先生を講師にお迎えし，理論研修「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業展開の実際」を行う。
子ども主体の授業改善の取組を始める。
児童アンケートを実施，分析を行う。
第１回ワークショップ

理論研修の様子

６　月

授業研究会　国語（3 年）を実施。
パワーアップタイムを刷新。思考スキルを系統的に位置付ける。
各部会に分かれて，公開授業の教材研究，指導案作成。

７　月

授業研究会　国語（1・4 年）・算数（2 年）・外国語活動（3 年）・外国語（6 年）全学級実施。井上一郎先生にご指導いただく。
学校評価（保護者，児童）実施，分析を行う。
第２回ワークショップ

授業の事後研の様子

８　月

年間計画の見直しと新学習指導要領を基に指導案作成。
井上一郎先生をお迎えし，指導案検討会を実施。
年間指導計画の見直し・校内環境整備

９　月

部会ごとに授業研究会を行う。子ども司会お悩み相談会を開催。
校内環境整備
第３回ワークショップ

子ども司会お悩み相談会の様子

１０月

授業研究会　生活単元学習（育成学級）実施。
児童アンケートを実施，分析を行う。
校内環境整備

１１月

研究発表会，開催。
今年度の学力・学習状況調査の結果分析を行う。

全国学力・学習状況調査の結果分析の様子

１２月

研究発表会での単元・授業・分科会内容の共有。
年間指導計画の見直し

１　月

授業研究会　算数（2 年）を実施。井上先生にご指導をいただく。
研究協議会・実践協議会開催

授業の事後研の様子

２　月

研究紀要の作成。
年間指導計画の見直し。

３　月

児童アンケートを実施，分析を行う。
１年間の振返り（成果と課題）来年度の研究の方向性を共有。

11 月 2 日の研究発表会で公開した授業は次の 6 授業である。

１年生
国　語

４年生
国　語

２年生
算　数

５年生
算　数

３年生
外国語活動

６年生
外国語

10 月にはうぐいす学級（育成学級）が生活単元学習「『おいもやさん』へようこそ」の授業を，1 月には 2 年生が算数「長さちょうさたい～長さんからのちょうせんじょう～」（量の単位と測定：100 ㎝をこえる長さ）の授業をそれぞれ公開した。

「『おいもやさん』へようこそ」授業の様子

「長さちょうさたい　～長さんからのちょうせんじょう～」授業の様子

今年度は，子ども主体の授業づくりを大きな柱として研究を進めた。どの授業も，単元展開を工夫し，必然性のある学習課題を設定したことで，子どもたちが主体的に学習する姿がみられた。

○　実践研究成果・分析及び活用方策

(1) 主体的・対話的で深い学び

今年度より子ども司会に全学級で取り組んできた。初めは「司会カード」を見ながらの進行，司会であったが，回を重ねるごとに自分の役割を自覚し，主体的に進められるようになってきている。「授業の主役は私たちである」の意識のもと，友達と生き生きと学ぶ姿が見られる。

子ども司会の様子

話合いが停滞し司会者が困っていたら「一度グループで話し合ったらどうですか」「今は，〇〇について話し合っているので，この意見は後で考えたらどうですか」といった声が上がるまでになった。また，単元を構想するに当たり，子どもの実態把握からスタートしたり，必然的な学習課題を設定したりすることで，子どもたちが受け身ではなく自分事として学ぶことができるようになった。その為「〇〇を調べたいので，30 ㎝ものさしよりも長いものさしを貸してください」「この課題を解決するためには，みんなで～したいです」などと，子どもたちから教師に要求する姿も見られるようになった。これらの姿が正に「主体的な学び」の姿である。

交流の様子

Personal Work，Group Work，Class Work を行うことで，しっかりと自分の考えをもったうえで友達と考えを交流するため，自信をもって話をする姿が見られるようになった。友達と考えを交流することで，新たな考えを知り，自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにもなってきた。そして，自分とは違った考えを受け入れる，折り合いをつけられるようにもなってきている。これが「対話的学び」の姿であると考える。

年度当初，私たちは「深い学び」について新学習指導要領で示されている三つの資質・能力の視点から次のように定義した。

□思考・判断・表現等
物事を深く考える力が身に付いているか　深い活動・深い思考
□知識・技能
もともと知っている知識をこれまでに身に付けている個々の力と結び付けてどのように変化させていくか
□学びに向かう力・人間性の涵養
身に付けた力や知識・技能が社会の中で将来活用できるか

5 年生の算数「夢の水族館―水そうの形をデザインしよう―」では，学習課題を常に意識し，思考スキル「応用する」を基に子ども自身で新しい図形の面積の公式を導き出し，水槽をデザインしていった。学習が進むにつれて「学習したことを生かして考えることができた」「形は違うけれど面積の求め方には共通点があることに気付いた」「パワーアップタイムで学んだプレゼンの方法を活用しようと思う」などの深い気づきが増えていった。

12 月に全校で人権集会を開いた際は，6 年生の子どもたちが全体司会を担当し，たてわりグループでの話合いが行われた。その際も一人一人がしっかりと考えを交流することができた。

人権集会で６年生が司会をする様子

人権集会での話合いの様子

また，子どもたちの「学びの振り返りアンケート」において「今まで学習してきたことをつかって考えている」「学校で学んだことを，生活や社会の中で役立てている」の問いに 9 割の子どもが肯定的な回答をしている。これらのことから，本校において「深い学び」が実現できていると言えるのではないだろうか。

(2) 研究の成果と課題

本市が独自で行っている学習支援プログラム「ジョイントプログラム」において，5 年生 6 年生とも国語・算数ともに全市平均を上回る良好な結果であった。（5 年生は国語 4 ポイント，算数 7 ポイント，6 年生は国語 6.2 ポイント，算数 9.2 ポイント全市平均より上であった）また，この結果は，昨年度受けた前回のプレジョイントプログラム，ジョイントプログラムの結果よりも 1 ポイントから 3 ポイント高くなっている。平成２９年度全国学力・学習状況調査においても，国語・算数ともに平均正答率が全国平均を上回る良好な結果であった。特にＢ問題においてより良好な結果であった。これらのことからも，本研究の取組の成果が児童の学力に表れていると言える。

他にも 11 月 2 日に開催した研究発表会には 200 名近い参観者があり，アンケートの中には「子どもたちが生き生きと学んでいた」「主体的・対話的で深い学びになっていた」「自ら考え，行動する子どもを育てるためには，司会をたてたり，単元の中で必然性をもたせたりすることの重要性を知ることができた」といった感想が多く寄せられた。

しかしながら，「学びの振り返りアンケート」を見てみると「パワーアップタイムに取り組んだことを，ほかの学習にも生かしている」についての肯定的な回答が 76%にとどまっていたり，学びの姿にも個人差があったりするのが現状である。学校として学びのスタイルが確立しつつあるこの時期に，再度これらの取組の意義と有効性を教職員みんなで共通理解し，一人一人の子どもに生きる力を確かに身に付けるために，同じ考えのもと更に取組を進めていきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	５９	都道府県名	京都市

拠点校名	京都市立向島東中学校

○　実践研究の具体的内容

生徒が興味や関心を持って授業に積極的に取り組むことを目指した授業づくりの視点から，本校では東京大学 CoREF が提案している「知識構成型ジグソー法」を用いた授業実践を取り入れた。授業の構築に当たっては，「授業のねらい（本時の授業を通じて生徒に何を身につけてほしいか，この後どんな学習につなげるために行うか）」を明確にした上で，授業の柱となる，ジグソー活動で取り組む課題を設定するようにした。すべての学年，すべての教科でこの授業法を取り入れ，指導案を作成し，校内授業研究を行った。

この校内授業研究には，校区小学校（向島小学校・向島藤の木小学校）の教員にも参観してもらい，事後の研究協議会で意見交流を行った。「知識構成型ジグソー法」による授業づくりの研究と併せて，京都大学大学院教授　西岡　加名恵先生が行われるパフォーマンス評価のワークショップに教科代表の教員が参加し，学びを校内教科会で共有した。

授業の様子

小中合同授業研修会

４月	学力向上研究部研修（年間計画） 全国学力・学習状況調査	１０月	若手実践研修（学級活動）
５月	小中授業研究（小学校） パフォーマンス評価研修	１１月	公開授業及び研究報告会
６月	小中授業研究（中学校） 評価・評定に関する研修	１２月	人権教育・国際理解教育研修
７月	若手・中堅教員実践研修（模擬授業） 生徒アンケート（前期）	１月	パフォーマンス評価研修
８月	小中合同研修（共通テーマについて） パフォーマンス課題に関する研修 各教科学習確認プログラムの分析	２月	管外研修 年間反省
９月	パフォーマンス課題に関する研修 小中授業研修（中学校）	３月	管外研修伝達研修 今年度の総括

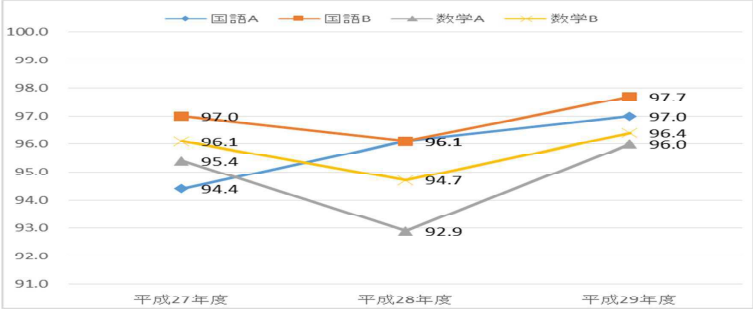
他に，年間３回校区保育園・幼稚園・小学校・児童館・中学校の代表者による会議を行い，校区の子どもたちの現状と課題解決に向けた方策を話し合った。その中で，今必要とされる力についての共通理解を行った。

○　実践研究成果・分析及び活用方策

毎年４月に中学校３年生を対象として実施されている全国学力・学習状況調査について，本校の結果の分析を行った。分析にあたっては，平成 29 年度の帳票のほか，平成 27 年度から平成 28 年度の調査結果も用いて経年で比較した。

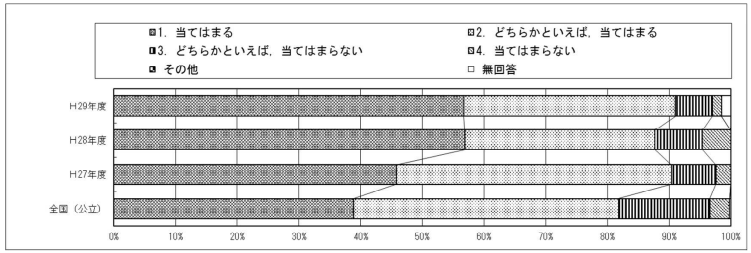
本校は全国（公立）と比較した場合，平成 27 年度から平成 29 年度にかけて全教科で得点が低く，継続して課題となっている。

一方で，年度によって高低はあるものの，主として「活用」に関わる問題が出題される国語Ｂ，数学Ｂのゆるやかな上昇傾向がうかがえ，言語活動の充実に向けた取組との関連が考えられる。国語Ａは，３ 年間継続して向上しており，数学Ａは，平成 28 年度は下降しているが，平成 29 年度は上昇している。これらより，全国と比べて学力には課題があるものの，授業改善の成果が徐々に表れ始めていると考えられる。



全国学力・学習状況調査　平成 27 年度から平成 29 年度までの標準化得点推移

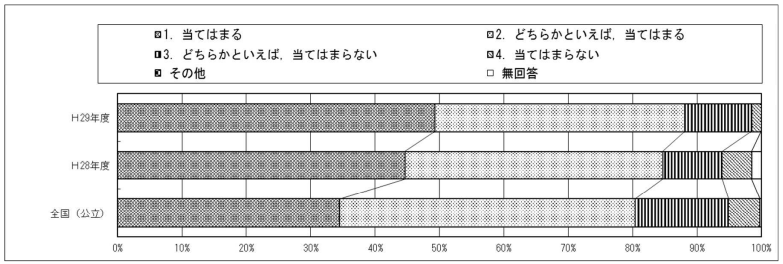
言語活動については，「1，2 年生のときに生徒間で話し合う活動をよく行っていた」の肯定的割合が全国（公立）を大きく上回っており，これはジグソー法を用いた授業改善の成果が表れていると考えられる。



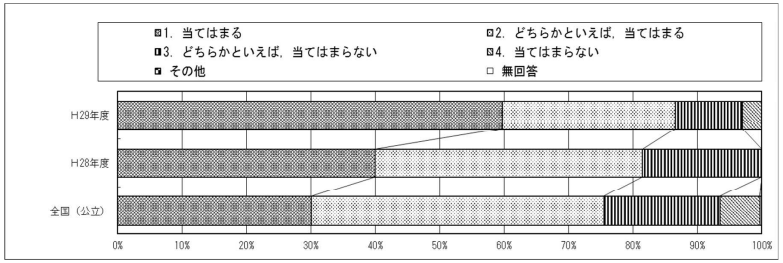
「1，2 年生のときに受けた授業では，生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」

教員と生徒の関係性については，「先生は，あなたの良いところを認めてくれている」「先生は，授業やテストで間違えたところや，理解していないところについて，分かるまで教えてくれる」の「当てはまる」の割合が全国（公立）を大きく上回っている。これらのことから，教員の姿勢が生徒にも伝わっており，教員と生徒との間で良好な関係を築くことができていると考えられる。

これらについては，生徒と共に授業改善を目指してきた成果と言える。



「先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」



「先生は，授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれますか」

本校は平成 26 年度に「知識構成型ジグソー法」を取り入れ，生徒の学力向上を目指し研究を進めてきた。これは，生徒の学力向上とともに新学習指導要領を意識した授業を展開するための，指導者のための研究でもあった。

これからの社会において生徒に必要な力は，基礎学力を基盤にして生活に生かす力，いわゆる「応用力」であると考える。また，人の話を聞き自分の意見も話す中で折り合いをつけ，課題解決を目指す能力が必須である。この必須である力を本校生徒が会得するためにジグソー法が有効なのかどうかは，今まで暗中模索の状態であった。しかし，今年度この授業法の成果が全国学力・学習状況調査「調査分析」から明らかになったことがある。それは国語Ａや数学Ａの力が上昇していることや，「１，２年生の時に生徒間で話し合う活動をよくやっていたか」という生徒質問紙から読み取れることである。この生徒質問紙に関しての肯定的割合は全国を大きく上回っており，言語活動を取り入れた授業法である「知識構成型ジグソー法」が生徒にとって有効であることを示していると考える。また，今

年度の校内授業研究後の生徒アンケートにおいても，ジグソー法での授業は「とても楽しかった」「楽しかった」という感想をもった生徒が多く，また，「協力することの大切さがわかった」や「みんなとやると気づかないことがわかるからよかった」などの感想があった。我々が目指している力に，少しずつではあるが近づいてきた様に思う。

この３年間の経年変化では前文に述べた様な成果が見られるものの，これは着地点ではなくまだ途中経過に過ぎない。生徒は授業でわからない部分があればわかるまで教師に教えてもらい，安心して次の課題に取り組む姿勢は出てきているものの，家庭学習が定着していないことや，学習の姿勢がなかなか身につかない生徒がいることが大きな課題として残っている。

家庭の学習環境作りに関する意識が低いという面はあるが，生徒自らが自分の将来のために学力を身につけ，「なりたい自分」になるために学びたいという姿勢もまだ弱い。今後は自分の将来に繋がる力をつけるための「キャリア教育」や，自ら学ぼうとする姿勢作りという意味での「授業規律」・「規範意識」について教職員全体で考え，共通認識し実践してくことが必要だと考える。これらのことは，指導法の開発・研究にとらわれすぎて置き去りにされるようなことがあっては絶対にいけない。

また，ジグソー法の研究ではまだ到達していない「評価方法」についても課題が残る。これについては，今年度から取り組み始めている「パフォーマンス評価」の研修・研究を深め，生徒の学力向上に繋がるように取り組みたいと考えている。

グループでの活動等は学習を深めるために非常に有効な手段ではあるが，そのためには指導者の力量が必要である。厳しい実態の生徒たちによい活動をさせ，さらに深い学びにつなぐためには，学級を掌握する，コーディネートする力が絶対条件となってくる。授業規律や規範意識の育成と併せ，このことについてもまだ不十分さが残った。

向島東中ブロックにおける各校においては，上述のとおり基礎的・基本的な内容の習得と活用・探究の両立に課題は残っているが，実践協議会において，外部の有識者の委員の先生方からも，「本実践研究を通じた，主体的・対話的で深い学びにつながる，様々な角度からの指導方法の考察・実践が，今後に生きてくる。」という御助言も踏まえ，中学校ブロックとして，小中一貫の視点のもと，児童生徒の可能性を最大限に引き出す教育の実現に向け，引き続き，研究実践を深めていきたい。

そして，「教育は人なり」とも言われるが，今後さらに「教師力」（人間力）を高めるために学び続け，生徒の学力向上を目指したい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	５９	都道府県名	京都市

拠点校名	京都市立向島小学校

○　実践研究の具体的内容

（1）『丁寧で，細かいステップを踏む』という視点

①「主体的・対話的で深い学び」に向かうための土台作り

厳しい学力実態の中でも，「全員ができるようにする」「分かりたいと思うことが授業の中で分かるようになる」，そんな基本の力，つまり「主体的・対話的で深い学び」に向かうための土台となる力を，どの子にも確実に付けることをまず大切にしたいと考えた。

また，本校を含む向島東地域の子ども達を育てていく上で，小学校就学前の生活実態・保育実態の把握・改善にまで手をつける必要があると考えている。そのために，近隣の保育園・幼稚園と，同じ目標のもとで地域の子ども達を育てるスタンスを継続して重要視している。昨年度末あたりから，「非認知能力の育成や家庭教育力を高める工夫」にまで話題が充実してきている。

②小中一貫した研究テーマの設定

今年度は，「『折り合いをつける力』つまり，他者を受け容れ自己と向き合い，よりよく生きようとする態度を育てていく。」これを３校の共通の研究テーマとしてめざすようにした。「折り合いを付ける力」を育て，さらにその力で学力向上に向かえるように，教科の授業作りの中での仕掛けを中心に，小中一貫して学校教育活動全ての中でこの力を育成していきたいと考えている。

③思考を深める語彙の獲得

語彙のレパートリーを持ち合わせていない児童が多い中，思考を深めたり活性化させたりしていくための『語彙を豊かにする』ことが特に重要であると考えた。そこで，本校の研究教科を国語と算数とし，研究主題を『ねらいがぶれない授業構築～「理由」「順番」「場合分け」が大事～』とした。

具体的には，一人ひとりの思考・表現の手がかりとなる語彙として，

「理由」つまり「そのわけは・・・だからです。」

「順番」つまり「まず・・・次に・・・最後に・・・」
「場合分け」つまり「この場合には・・なるが，別のこの場合には・・になる」
これらを授業の中で意図的に取り入れていくようにした。

つまり，「理由」「順番」「場合分け」を単なる話型としてではなく，あくまでも「子どもの思考の手がかり」として与えているという点に本校研究のポイントがある。特に算数では，教科の特質を考えた時に，これらの「理由」「順番」「場合分け」の３つは，日常の学習の中で多く使えるものと考えられる。これらの思考の手がかりになる語彙を一部の児童だけでなく，すべての子どもたちが使って思考・表現できる場と時間を設定するように考えた。

このことは，新学習指導要領「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」１の１１の中に記載されている，『単元などの内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること』という部分に合致するものと考えている。各クラスで，３つのキーワードを書いたカードを活用し，特に算数で，また，算数以外の場面でも活用した。教師が意識してカードを活用し，子どもたちが常に使い，使っていく中で慣れていくことで，子どもたちの話す様子，使う言葉も変化してきた。

④「話す力」・「聞く力」を特化

研究教科「国語」では，教科の特質を生かすという意味で，今年度から「話す力」「聞く力」の育成に特化した研究を進めてきた。具体的には，国語科の「話す・聞く」単元を中心に，確実に力をつけられるように鍛える。学習し，身に付けたことを様々な場面で使って慣れる。これらを繰り返すことにより，身に付き，活用できるようになるであろうという仮説に基づき，国語科で学んだ「聞く力」「話す力」を他教科・他領域で生かせるような取組を設定した。

４月に取組を始めてから，少しずつ，児童の話す様子，聞いている様子は変化してきているが，特に「聞くこと」については，研究の中心に置いたからこそ，見えてくることであるが，まだまだ課題が多く残っている。それは，聞く態度だけでなく，「話の中心を考えて聞くこと」や，「相手の意図を考えながら聞くこと」などである。その要因としては，子どもたち自身の意識の課題もあるが，聞きたいと思える発問や課題設定などの教師側の課題も見えてきた。話を「聞く」「聞かせること」の難しさをひしひしと感じている。

（２）『新たな学び方を大胆に取り入れていく』という視点

①中学校で活躍できる子をめざす

向島東中学校では，『知識構成型ジグソー法』を用いた協働型授業への実践的な調査研究を，ここ数年継続して実践している。それを受けて，校下の２小学校では，できるだけたくさんの児童が，中学校でのジグソー法を用いた新しい形態の授業の中で，意欲的に活躍できるように子ども達を育成するという具体的なねらいを大切にして授業を組み立ててきた。

②学ぶ意欲が高まるような学習課題の設定

平成２８・２９年の文部科学省の指定を機会に，京都大学大学院教授　西岡加名恵先生を中心に，先生の研究室の皆様にもお世話になり，「パフォーマンス課題並びに評価についてのワークショップ」に本地域の教職員も参加をさせて頂き，直々に指導を受けられた。そこで学んだことを，少しずつでも日々の授業実践の中で取り入れるようにしてきた。どの単元にも，本時にも，「学習のめあて」を設定することの大切なことは当然であるが，毎時間の学習をその「めあて」に向かって進めていく時，児童自身が「学習したい」と思いながら学習することこそが，学習内容定着にも大きく影響する。そこで，若手教員を中心とした，「パフォーマンス課題ならびに評価についてのワークショップ」研修に参加し，そこで学んだことをもとに，単元計画を練って，授業実践を行ってきた。子どもたちにとって必要に迫った課題設定が，「楽しそう。やってみたい。」「そのためには，こんなことを知りたい。」「私にもできるかもしれない。」という思考を生み出し，単元の最後まで，その意欲が持続したという実感がある。また，自分から学習しようという意欲が生まれることで，学習に向かう姿勢がよりよくなった児童もいた。

しかし，「パフォーマンス課題」を設定して計画を立てることは，簡単ではない。教科によっては，計画が立てづらいものもあるだけでなく，全単元で課題を設定しようと思うと，現実問題として，他の校務もある中で負担が大きいことも事実である。そこで，児童の実態や，つけたい力を精選して，実践していく必要があると考えている。

パフォーマンス課題を設定した授業例（６年）

≪教科名　国語　　単元名「わたしはこう見る」　時間数　５時間 ≫

①作成した単元計画書の指導した単元の説明

本単元の言語活動では，「分析的に絵画に向き合い，事実として自分が絵画のどの点に何を感じ，どのように意味づけたのかということに意識的になること」を重視し，「絵から読み取ったこと，感じ取ったことを伝える文章を書くこと」を設定している。

児童は，「絵を見て読み取ったことや感じたことを，よりよく伝える」という学習計画の設定から，「絵から感じたことの中から書くことを決め，全体を通して事柄を整理すること」と「事実と感想，意見などを区別するとともに，必要に応じて絵の様子を簡単に書いたり詳しく書いたりすること」に基づきながら学習計画を立てるだろう。そこで，書くことの他に，「自分の見方や感じ方が伝わるように,表現を工夫して相手に伝え　る」ことを言語活動として位置付けた。

したがって，本単元でねらう「表現の効果を確かめたり工夫したりして書くこと」を通して，学年テーマである「相手意識を持った話し方・聞き方を考える」を実現するのにふさわしい言語活動であると考える。

②「本質的な問い」「永続的理解」と「パフォーマンス課題」の設定理由

この単元の学習を通して，事実と感想，意見などを区別して，感じたことの中から書くことを決め，表現の効果を確かめたり工夫したりして相手にわかりやすく伝えることができる力を育てたい。また，相互交流の場面では，同じ観点に着目しても感じ方やものの見方はさまざまであるという点や，全体的にその人らしい意味付けができている点に着目し，互いの個性を認め合う学習活動としたい。

③指導上の工夫

６年生の「書くこと」の学習では，本教材の前には「ようこそ，私たちの町へ」（パンフレット），「未来がよりよくあるために」（意見文），後には「忘れられない言葉」（随筆）が設定され，多様な文種の記述に取り組むことが求められている。それと同様に，自分の考えを表現したり，書くことを通して自分を見つめたりしながら，書き手である自己を意識する表現活動を経験してきた。また「話すこと・聞くこと」の学習としては，「学級討論会をしよう」，「未来がよりよくあるために」を通して，立場を明確にして主張し合って考えを広げることや，意見を聞き合って考えを深める表現活動を経験している。

児童の実態としては，自分の考えや意見を頭の中だけで整理し，いきなり話すというのは大変難しい。しかし，これまでの学習経験の中で，メモや教科書Ｐ.１４８のような簡単な書きだしの手がかりがあると，話してみようとか話せそうという思いを持って学習に向かう児童が多いように思う。９月に学習した「未来がよりよくあるために」の単元では，付箋を使ったメモをもとに，自分の考えを友だちに伝えようとする児童の姿が見られた。そのため，本単元でも学習活動に付箋での整理を取り入れた。また表現の一覧を提示し，記述の型だけでなく，相手への表現効果を意識させることを支援する手立てとした。

④実践を振り返って

「書くこと」に支援が必要な児童にとっては，付箋を使った書き出すことやワークシートに貼っていって整理することが有効だったと思う。しかし，作業が多くなるので，伝え合い・交流の時間が少なくなるという反省点もあった。

本時では３枚の絵を用意し，好きな絵を選んで学習を進めた。３問設定の３問目にあたるパフォーマンス課題にも，自信を持って取り組めていたと思う。

（３）研究活動を支える取組

○おはよう読書

目的：教員の読み聞かせにより，子どもたちが読書に親しめるようにする。

方法：年間７回，朝読書の時間に，読み聞かせを行う。（職朝のない火曜日）
図書部と連携し，読んだ本を図書だよりで紹介する。

○ふれあい読書

目的：ペア学年同士で読み聞かせをすることで，聴き手を意識して活動する機会をもつ。

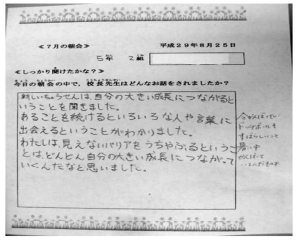
方法：読書週間の期間中に，各学年で半分ずつ教室を入れ替え，子ども同士で読み聞かせをする。（縦割り活動，図書部との連携）

○掲示物：言葉に関する掲示物を低中高部会ほかで作成する。

○朝会のふりかえり

目的：相手が何を伝えたいのかを考えながら聞く機会を持つ。

方法：月一回の朝会で，校長が話の中で何を一番伝えたかったのかをクラスで児童に　問う。ふりかえりシートを作り，その他の場面でも使用する。



＜７月の朝会＞　　平成２９年８月２５日

５年　２組

＜しっかり聞けたかな？＞

今日の朝会の中で，校長先生はどんなお話をされましたか？

新しいもうせんは自分の大きい成長につながるということを聞きました。
あることを続けるといろいろな人や言葉に出会えるということがわかりました。
わたしは見えないけれどをうちからはるということはとても自分の大きい成長につながっていくんだなと思いました。

（４）「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた先駆的な授業の研究を体験する

若手教員を中心に「パフォーマンス課題を活用した授業＆評価モデル」のワークショップに参加し，その上で，パフォーマンス課題を取り入れた授業を試みる。

パフォーマンス課題を設定し，活用していくためには，児童がその基礎となる力をしっかり身につけておく必要があると考える。それは，一人一人の児童が，一定の学力・スキルを身につけ，同じスタートラインに立っている状態で話し合いを行い，学習を進めることで，その効果が表れると考えるからである。

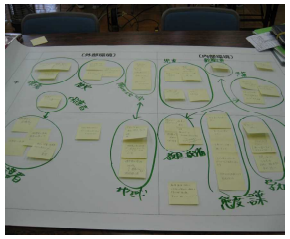
そのために，細かいステップで，どの児童にもじっくり学力・スキルを身につけさせ，《ねらいがぶれない授業構築～「理由」「順番」「場合分け」が大事～》という本校の研究を柱にし，「鍛えて・使って・慣れる」取組を積み上げることで，よりよい「対話的・主体的な学び」に繋がると考えている。

≪PDCA を活用した本校研究に関する研修年間計画≫

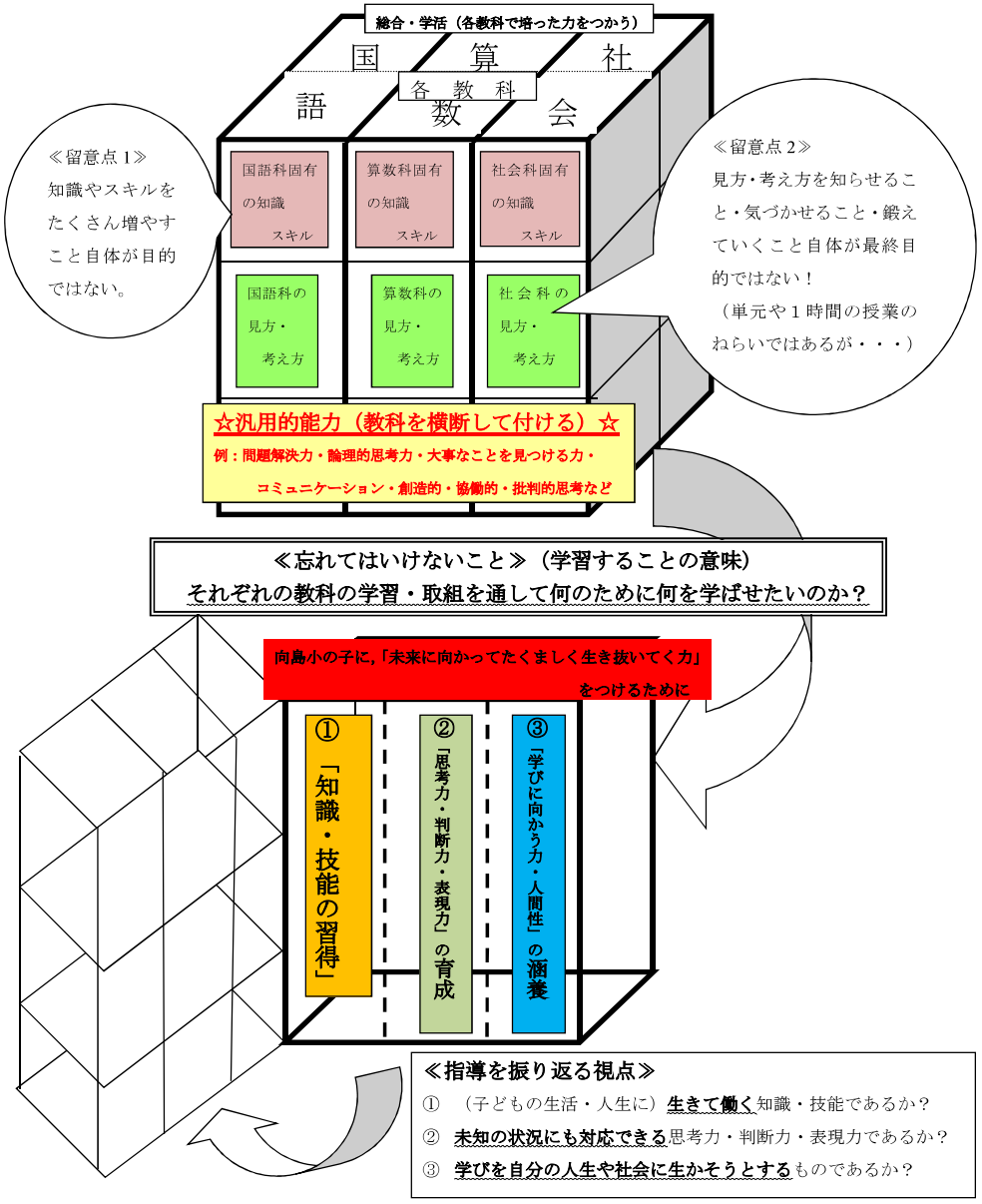
	日　程	研　修　内　容
①	４月～	パフォーマンス課題を設定して，６～７月で授業実践できる単元の選定
②	５月２２日（月） （理論研修）	第１回　ワークショップ（対象教科・国語・算数・理科・社会） （１）「パフォーマンス課題・評価」「本質的な問い」についての講義 （２）ワークショップ（教科別・小中混同グループ）
③	６月～７月	パフォーマンス課題・評価をもとに授業実践　（全員）
④	７月２６日（水） （実践交流）	第２回　ワークショップ（対象教科・国語・算数・理科・社会） （１）　授業実践の交流 （２）　11 月以降の公開授業に向けた単元計画書の作成（夏休み中）
⑤	９月１２日（火）	第３回　ワークショップ（対象教科・国語・算数・理科・社会） （１）　公開授業に向けた単元計画書の交流 （２）　パフォーマンス課題についてのルーブリックの作成
⑥	１１月～１月 １１月２９日（水）	公開授業　実践・公開授業　参加 研究発表会
⑦	１月 18 日（木） １月 29 日（月） （全員参加）	校内研究会（全員で反省の交流・ＳＷＯＴ分析） 今までの研究の取組のチェックをし，今後の研究活動に生かす。 研究協議会（全小中学校対象の発表会） ※各校から研究成果を報告・発表の上，グループ協議を行う。
⑧	２月～３月 ２月８日（水）	「パフォーマンス課題」を設定した授業実践 企画委員会（来年度の本校のカリキュラム・マネジメント会議） 来年度に向けて，カリキュラム・マネジメントの視点から本校の研究の方向性・具体的な取組について交流する。

（５）ＰＤＣＡサイクルを活用した独自のカリキュラム・マネジメントの作成

「各教科の本質的な学びの意味」（図２）と，本校独自のカリキュラム・マネジメント作成に向けての流れ（図１）を教職員間で確認し，来年度の取組へとつなげられるようにする。



「各教科の本質的な学び」の意味と目的（図１）



向島小カリキュラム・マネジメントのイメージ図　（来年度に向けて）　（図２）

≪３つの側面≫

① 教科横断的な視点をもって教育内容を組み立てること

② 学校教育におけるＰＤＣＡサイクルを確立すること
（計画・実践・評価・改善）

③ 教育活動に必要な人的・物的資源など，地域等の外部の資源を求めての条件整備をすること（ヒト・モノ・カネ・コト・時間他）

主体的・対話的で深い学びの視点によるカリキュラム・マネジメントの推進のために

何ができるようになるか

☆学校教育目標（基本）

「未来に向かって
たくましく生きぬく力をつける」
～副題　変更予定～

何が身についたか

☆重点目標

☆学校評価を通じた学習指導の改善

子ども達の資質・能力の育成や
「カリキュラム・マネジメント」と
関連付けながら実施

① 子どもの実態
子どもを取り巻く家庭
・地域の実態把握

ＳＷＯＴ分析
本校の強み・弱みを
改めて共通理解する

向島小では　，
子どもの発達（育ち）を
どのように支援するか

・子どもの発達の支援
・特別な配慮を必要とする
子どもへの指導

②目指す子ども像

・今年度（現在）の子ども
の実態から。
・今後必要される力から

≪教員の意識の刷新「教育の質的な転換の理解・教え方の改善・学び合いの意義について」≫

何を　学ぶか
（何を学ばせるか）

①教育課程の編成

本校の子どもの
「深い学び」の姿とは？

・校務分掌表・学校行事（三学期制）
・時間割・学校全体で研究すること
・道徳・英語（外国語活動）
・総合的な学習・特活　など

どのように学ぶか
（どのように学ばせるか）

②教育課程の実施

「深い学び」の姿に到達できるよう
にする方法とは？

③実施するために　何が必要か

学校指導体制の充実（本校独自の教育課程）　家庭・地域との連携・協働
人的配置　重点的な環境整備　重点的な予算執行

例：ＡＬの事例研究・理論研修・外部（他校）の研究より学ぶ

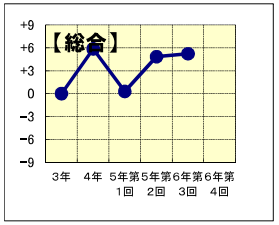
○　実践研究成果・分析及び活用方策

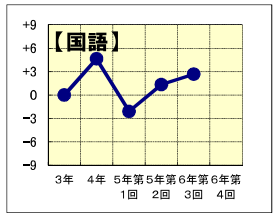
下記①のグラフは，京都市の全市平均点を０として，本校５年生・６ 年生のプレジョイント，ジョイントプログラムの結果を指数でグラフ化したものである。特に６年生は，非常に厳しい学力実態の中，全国学力状況調査などの活用問題でまだまだ課題が大きいものの，ここ最近では，結果が少しずつ安定して表れてくるようになってきている。

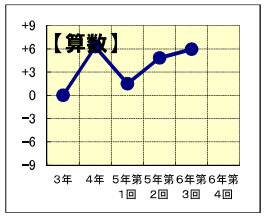
① 市独自の学力調査テスト　学校平均正答率からみた「がんばりグラフ」より

現６年生（3・4 年　プレジョイント⇒5 年ジョイントプログラムからの経年変化）

２教科総合　　国　語　　算　数

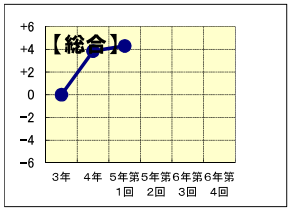


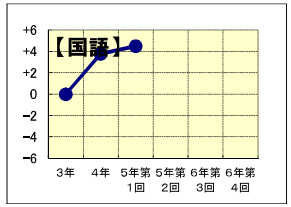


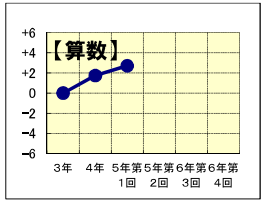


現５年生（3・4 年　プレジョイント⇒5 年ジョイントプログラからの経年変化）

２教科総合　　国　語　　算　数

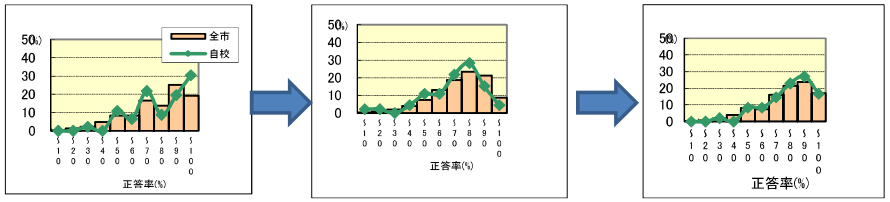






また，現６年生「国語」の過去３年間の度数分布図②を見てみると，正答率の分布の山が，正答率が低⇒高の間にいくつもの山が存在していたのが，ここ３年間で山の位置が正答率の高い方へ少しずつシフトしてきていることが分かる。その傾向は，各学年で共通した傾向がある。

②



これらの結果から，児童の実態に合わせて，地道に丁寧なステップを踏むことと，新たな学びを大胆に取り入れることを大切にした授業を積み重ねてきたことが，一人一人の学力が少しずつ上がってきた成果として表れてきている一つの指標として見ている。

算数は，昨年度から，国語は今年度から研究教科として取り上げ，実践を重ねている最中である。

基礎的・基本的な内容の習得と活用・探究の両立に課題は残っているが，実践協議会において，外部の有識者の委員の先生方からも，「本実践研究を通じた，主体的・対話的で深い学びにつながる，様々な角度からの指導方法の考察・実践が，今後に生きてくる。」という御助言も踏まえ， 今後も児童の実態を見据えて，子どもたちの学びがより良いものになるよう，パフォーマンス課題の設定などの新しいものも積極的に取り入れて，実践を積み重ねていきたいと考えている。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「教科等の本質的な学びを踏まえた
アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

平成２９年度委託事業完了報告書【拠点校】

番号	５９	都道府県名	京都市

拠点校名	京都市立向島藤の木小学校

○　実践研究の具体的内容

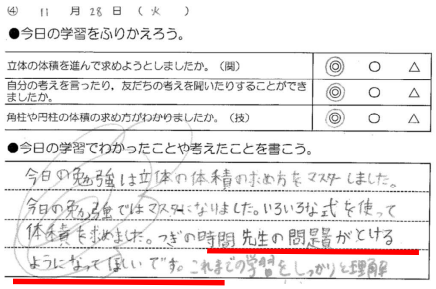
厳しい学力実態は変わらないが，全国学力学習状況調査・児童質問紙や学校評価アンケートでは，「学ぶ意欲」「勉強がわかるようになりたい気持ち」が向上している。学習規律の浸透，意欲の向上を学力に結びつけるための授業改善が求められると考え，研究主題を「共に学び，生き生きと学習に取り組む子」の育成～アクティブ・ラーニングを意識した話し合い活動の充実をめざして～と掲げ，授業デザイン力を高めるため，授業の流れに重点をおいた実践研究を進めた。

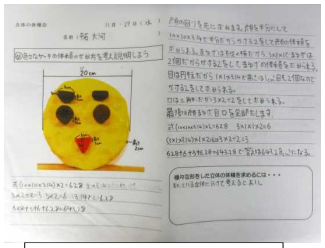
学習に必然性・必要性を見出すことで，受け身の学習から主体的な学習に変容できると仮定し，授業改善の視点として「学びの必然性」に着目した。６年生では『先生からの挑戦状』シリーズとして，単元導入時に既習事項を使って問題解決する活動や，単元中盤から終末の時期にパフォーマンス課題として取り組む学習活動を取り入れてきた。

算数・立体の体積で取り組んだパフォーマンス課題では，既習事項を使って複雑な立体の体積を求める学習をした。「どのケーキが最も大きいか調べて，報告書を作成してほしい。」という依頼に子どもたちが応じる形で授業が進んだ。３種類のケーキ模型が配られると，一斉にグループでの話し合いが始まった。興味津々に模型を触っていた子どもたち，目や鼻を取り外したり，重ねたりするうちに，「ここ

は円柱」「この部分は角柱」「底面積は」と既習事項を使って解き始めた。その後30分近くグループで話し合い，全体の体積を求めていた。長時間の話し合い活動であったが，子どもたちは課題に挑戦し続け，グループで考えを合わせて解答を導き出していた。学力を考慮したグループ構成やそのグループに適した課題提示，具体物の準備等が効果的な支援となって，一人一人が意欲や緊張を持続させることができたと思われる。さらに，集団解決で説明している際には，同じグループの子どもたちがうなずきながら見守る主体的な学びの姿が見られた。ルーブリックとなる報告書は，個人の考えや初めの考えと比べて精選された分かりやすいものになっており，対話を通してお互い高め合い，深い学びに至ったことが見うけられる。学習のふりかえりからも「学びの必然性」「対話・言語活動の有用性」「適正な自己評価」等，子ども自身が実感していることが感じられる。

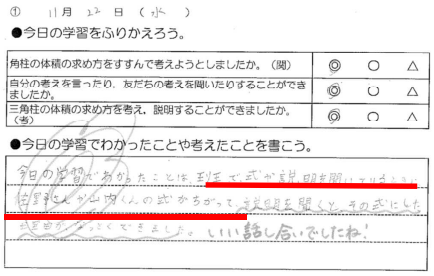
■ 学びの必然性

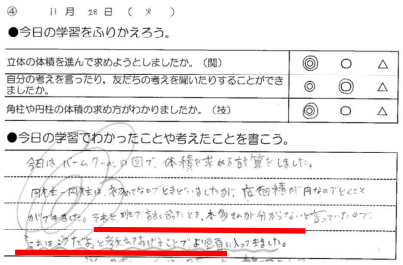




『報告書』（成果物）

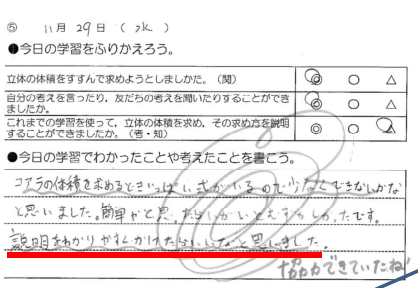
■ 対話・言語活動の有用性

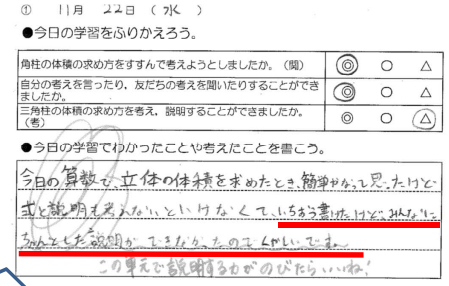




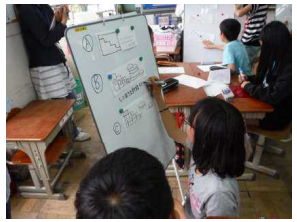
「自分が説明する」ことで，さらに理解が深まることと実感している。（Out Put）

■ 適正な自己評価





「問題を解いても説明できない」「分かりやすい説明がしたい」と振り返り△としている。本時の学習を適正に評価をしていると共に，活用や表出することで理解を深めようとしている。



向島東中学校で実践されている知的構成型ジグソー法を経験するため，小学校でもエキスパート学習・ジグソー学習・クロストーク等の話し合い活動を取り入れた。

６年生・算数「わくわく算数」の単元・複雑な図形の面積を求める学習では，全員に自分の考えを持たせるため，学力を考慮した求積方法によってエキスパートグループを構成した。ジグソー学習では，ホワイトボードを活用し，キーワードや矢印等簡単な表現を使って説明できるようにした。これらの支援によって，子どもたちは活発に考えを出し合うことを通して，「自分の考えを課題解決に生かすこと」や「対話のよさ」に気づき，本時の学習で達成感を味わうことができた。

しかし，この単元は４年生の学習内容であり，めあては「既習事項を使って，説明の仕方や話し合いのよさを理解する。」である。比較的定着率のよい「求積の公式」を用いて解答する問題であったため，全員が自分の考えをもつことができ話し合いが活性化した。６年生の学習内容であれば，問題理解に個人差が生じ話し合い活動の活性化は困難だと思われる。

このように「主体的・対話的で深い学び」の実践には，基礎的基本的な学習の定着が欠かせない。話し合いに参加できる力を身につけていなければ，挑戦する意欲やあきらめずに取り組む努力は，生まれない。この研究を通して「主体的な学び」と「基礎基本の定着」は両輪となって，子どもの学力を支えていると改めて実感した。学習基盤作りとして語彙や経験を豊かにする，さらにすべての教育活動の根幹となる一人一人の「心の安定」を図る，本校不変の取組を大切にしながら「主体的な学び」と「基

礎基本の定着」について，どの単元で・どちらを重視した学習をするのか明確にすることが求められる。

時　期（月）	研究活動	内　容
平成 29 年　４月	３校校長会 校内研修・研究提案 小中主任会	研究概要確認 研究組織・研究内容等 教務主任・研究主任打ち合わせ
５月	校内研修・理論 校内授業研究会 ＡＬワークショップ	平成 29 年度研究について共通理解 育成・６年 パフォーマンス課題づくり
６月	校内授業研究会 小中連携授業研究会 小小連携授業研究会 ３校校長会・小中主任会	２・３・５年 中学校より２小学校への参観 向島小・授業公開
７月	校内授業研究会 小小連携授業研究会 ＡＬワークショップ	３年 向島藤の木小・授業公開 実践報告　成果と課題について
８月	小中合同研修会② 校内研修 ３校校長会・小中主任会	各校授業改善における成果と課題 研究発表会・指導案検討
９月	小小連携授業研究会 小中連携授業研究会 ＡＬワークショップ 校内授業研究会 校内研修	向島小・授業公開 中学校授業参観 研究発表　単元計画書作成 ２・４・５年 指導案検討・研究発表会に向けて
10 月	校内授業研究会 校内研修 ３校校長会・小中主任会	１・３・５年 研究発表会に向けて
11 月	校内授業研究会 研究発表会 ３校校長会・小中主任会	４年 １・２・３・４・５・６年
12 月	向島４小学校合同算数研究	６年
１月	校内研修 校内授業研究会 ＡＬワークショップ	研究発表会ふりかえり　次年度に向けて ５年 研究まとめ
２月	３校校長会・小中主任会	次年度の方向性について
３月	校内研修	年間ふりかえり

多数の授業研究を通して，指導案検討，研究協議の充実を図り，パフォーマンス課題についての理論研修と実践に重点をおいて取り組んだ。年度前半は，主に本校研究テーマとの整合性，授業展開・学習活動の検討，後半は，ルーブリック・学習成果物についての研修を実施した。その中で，授業終末の子どもの姿から学習のねらいを設定する「逆向き設計」を実践し，その有効性を実感した。

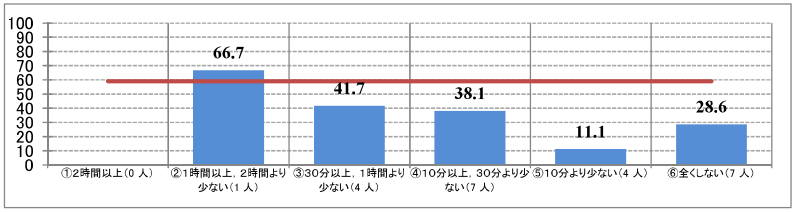
○　実践研究成果・分析及び活用方策

（１）本校におけるアクティブ・ラーニングの重要性

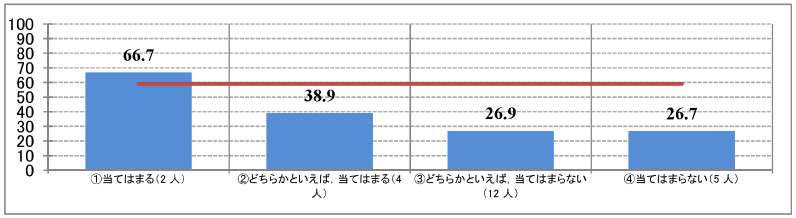
学力調査結果より，学習規律・学習意欲の向上が学力定着に結び付いていない現状が明らかになった。「わかる喜び・できる楽しさ」を実感させる授業改善と学びの基盤となる言語力の育成が早急に求められる。

厳しい学力実態に個人差の拡大が加わり，授業の焦点設定に苦慮してきた中で，昨年度から主体的・対話的で深い学びを目指すアクティブ・ラーニングの授業形態を取り入れてきた。どの子にも「わかる・できる」を実感させ，満足感を感じさせるため意図的に言語活動や協働学習の場面を設定した。学習状況調査児童質問紙とのクロス集計によると，「発表が得意」「話し合いを通して，考えを深めることができる」と答えた子どもの学力が高いことから，主体的・対話的で深い学びを目指すアクティブ・ラーニングへの授業改善は，厳しい学力実態の本校においても期待できると考える。また，読書時間・量と学力の相関関係も見られ，読書が言語力育成の土台となっていることが伺える。

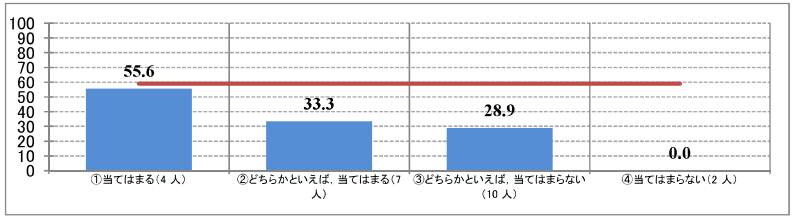
【学校の授業時間以外に，
普段（月～金）１日当たりどれくらいの時間読書をしますか。（児童質問紙）】



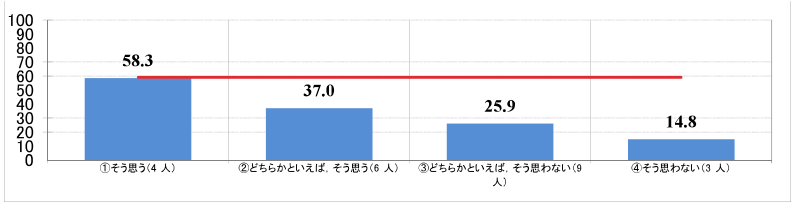
【友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか。（児童質問紙）】



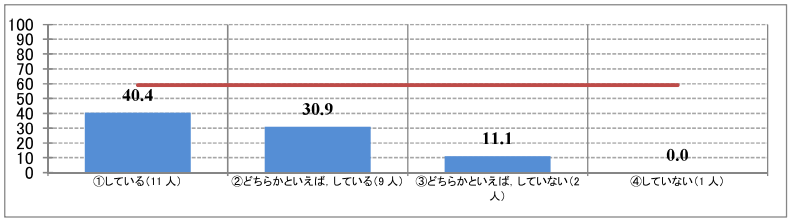
【5年生までに受けた授業で，学級の友達との間で話し合う活動では，話し合う内容を理解して，
相手の考えを最後まで聞き，自分の考えをしっかり伝えていたと思いますか。（児童質問紙）】



【学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，
広げたりすることができていると思いますか。（児童質問紙）】



【清掃活動や係活動をきちんとしていますか。（京都市・Ｊプロ）】



（２）子どもの「ふりかえり」を生かす

子どもの自己評価である「ふりかえり」を分析することで，「授業のねらいや学習方法が適切であったか」という指導者自身の自己評価とした。「主体的・対話的・深い学び」を数値化し，「適応題・テスト」と合致させることで，正確な理解や定着に至る個別の手立てを探る機会となった。さらに，自由記述欄の内容や授業観察から，学びの必然性の有無や学習活動の適正を検討した。

学年 組		5年1組			教科			社会			単元			農業			担当者			居林			NO			1									テスト		
時間		1 時間目			2時間目						3時間目			4時間目						5時間目			6時間目														
項目		1	2	3	1	2	3				1	2	3	1	2	3				1	2	3	1	2	3	平均	平均	平均				1	2	3
観点／項		主体的	対話的	知知習得	主体的	対話的	知知習得				主体的	対話的	知知習得	主体的	対話的	知知習得				主体的	対話的	知知習得	主体的	対話的	知知習得	主体的	対話的	知知習得				技能	知	考
1		2	3	3	2	2	3	2	2	2	3	2	3	2	2	2	2	2	3	2	2	3				45	45	45
2	D	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				25	10	5
3		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				3	3	3				35	50	30
4		3	3	3	3	2	3	3	3	2	3	3	3	2	2	2	3	3	3	3	3	3				50	50	45
5	D	2	3	3				3	3	3	3	3	3				3	3	3	3	3	3				35	40	45
6	D				3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				35	40	20
7					3	2	3	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				40	30	35
8		3	3	3	3	2	3	3	2	3	3	2	3	2	2	2				3	2	3				45	40	35
9		3	3	2	3	2	2	2	3	2	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	2				45	45	40
10		3	3	3	3	3	3				3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				40	45	35
11		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				50	50	50
12	D	1	1	2	2	2	2	2	1	1							3	3	3	2	2	2				35	20	10
13		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				45	50	50
14		3	3	2	2	2	3	3	2	2	2	3	3	2	2	3	2	2	2	2	2	3				25	30	40
15	D	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				3	3	3				5	30	25
16	D				3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				45	40	50
17	A	2	3	2	1	2	2	1	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2				40	50	50
18	D	2	2	1	3	3	3							3	3	3				3	3	2				25	20	10
19		3	2	3	3	2	3	3	3	2	2	3	2	2	2	3	2	2	2	3	2	3				50	40	50
20	A	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				50	50	45
21		2	3	3	3	2	3	2	2	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3				35	40	50
22	A	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				3	3	3				50	50	50
23		3	2	3	3	2	2	3	2	2	3	2	3							3	2	3				45	35	45
24								3	3	3							3	3	3	3	3	3				50	50	40
25		3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	3	2	2	2	2				45	50	30
26					3	3	3	2	3	3	2	3	3	2	2	3	2	3	2	2	3	3				40	35	50
27					3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3				45	45	50
28																												
29																												
30																												
31																												
32																												
33																												
34																												
集計		2.62	2.76	2.62	2.76	2.52	2.8	2.64	2.6	2.6	2.79	2.67	2.75	2.61	2.61	2.78	2.67	2.76	2.71							39.8	40	38.1

（18）自己評価・高
得点率・低

（17）自己評価・低
得点率・高

自己評価が高い子どもは，概ねテストの得点率が高い。また，自己評価は高いが，テストの得点率が低い場合（18）は，欠席等が多く今までの学習が継続されていないことが要因となっていると思われる。学習への意欲や「できるようになりたい」願いは強いが，既習事項，基礎基本の学習が定着していないため，問題に解答することができない。家庭学習や帯時間を活用した基礎基本の習得に重点をおいた指導が必要となる。一方，テストの得点率は高いが自己評価が低い場合（17），授業の課題設定や展開に課題があると考え，指導者自身のふりかえり，見直しが求められる。

主体的・対話的で深い学びに向かうためには，基礎基本の学習事項を着実に身につけることが不可欠である。自力で解答することや，自分の考えを明確に持って意見交流に参加することが深い学びへとつながると考える。そのため学習計画作成の際には，子どもの経験や理解度を把握した上で，基礎的基本的事項の習得を目指す学習とアクティブ・ラーニングの学習形態を明確にすることが求められる。その中でより効果的な本校の授業改善を模索していく。基礎的・基本的な内容の習得と活用・探究の両立に課題は残っているが，実践協議会において，外部の有識者の委員の先生方からも，「本実践研究を通じた，主体的・対話的で深い学びにつながる，様々な角度からの指導方法の考察・実践が，今後に生きてくる。」という御助言も踏まえ，読書活動の活性化，言葉に対する意識を高める等，長期的な展望を持って言語力の育成を図る取組の一層の発展，工夫が必要となる。